

大阪市内河川の風景 都市にふさわしい水の風景とは

大阪市立環境科学研究所

新矢 将尚

Landscape of Rivers in Osaka City, by SHINYA Masanao (Osaka City Institute of Public Health and Environmental Sciences)

1. はじめに

河川風景の特徴として、水の流れが生み出す多様な姿、広い眺望（オープンスペース）、一体化した自然環境の成立などが挙げられるが、これらは都市化の進展に伴い消失する傾向にある。人工景がほとんどになってしまった都市の風景に価値を見出すとすれば、それが市民生活の中に溶け込んでいるかどうかにあると考える。その要素としてどのようなものが挙げられるか、全国随一の河川面積率（9.3%）をもつ「水の都」である大阪市において河川風景を検証してみた。

2. 大阪市内河川の成り立ち

古くは上町台地（標高 10～25m）の東西は海であり、東側は淀川と大和川が運んできた土砂の堆積により徐々に陸地化した。また西側は沿岸州が形成されていたが、豊臣時代より堀川開削や浚渫の土砂を低地に盛って宅地造成に利用するなど市街地整備と一体化して河川がつくられていった。さらに新田開発や港湾整備（埋立）に伴い陸地化が進み河川も西へ延伸していった。現在の大阪市内河川を図 1 に示す。

このように、元来低地であるために排水性が悪く、さらに地盤沈下も進んだため、高潮や浸水の被害は甚大であり、全ての河川で大規模な改修が行われた。護岸は高く垂直であり、水際へ近づき難い箇所がほとんどであるが、道頓堀川を始めとして水辺空間の整備に力が注がれている。

3. 緑地河川の風景

市内南東部の平野川流域はかつて田畑が広がり、今川も農業用水路の役割を果たしていたが、流域の宅地化が進み、河川改修と同時に都市計画公園として整備されたため、今川は緑地帯を設けた河川になっている。しかし浸水対策のために強固な人工護岸が造られ、河道と緑道は分離されているため、水生生物相は貧弱である。外来生物も放置されており、市民の憩いの場として活用されているものの、里山のように固有で機能的な環境にはなっていない。代償的自然として都市の中に河川公園を残すのであれば、単に緑化するだけでなく、地域特性を考慮した上で多様な生物種を導入する必要があると考える。

4. 商工業地の河川風景

商工業地の風景は産業や経済活動の盛衰とともに激変する。このような地域の河川は水利を除けば生産に直接関与せず、もっぱら癒しや憩いの場として

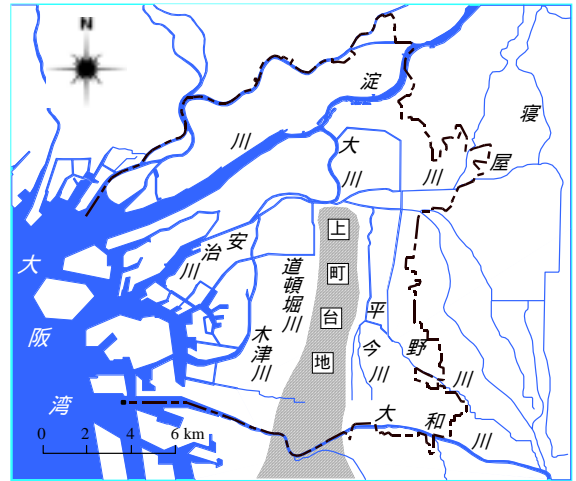


図 1 現在の大阪市内河川

の役割を果たしている。

人間が好む生活空間は、「見る」（眺望性）と「籠る」（休息性）を同時に満たす場所であるといわれる。大川～安治川は淀川の旧流路であり川幅も広く、眺望性がよい。また大川の両岸は連続した桜並木の公園になっており、休息性もよい。このような河川では市民や観光客の支持も大きく、大阪の代表的な河川風景の一つであると言える。

一方、繁華街を流れる道頓堀川では現在水辺遊歩道が整備されつつあるが、護岸沿いにビルが林立しているため眺望性が悪く、樹木や庇もないため休息性も悪い。しかしビル壁を彩るネオンサイン等の看板は華やかであり、市民や観光客に親しまれている。大阪では大川が街路に例えれば表通りで「昼」の顔であり、道頓堀川は裏通りで「夜」の顔である。これは人工景でしかない都市中小河川の社会的必然性の一例であると考えられる。

河口域は工業地帯になっているが、工場等の巨大施設の興亡は、風景に与える影響がきわめて大きい。そのため、その周囲には自然景を創出し、工場群を目立たなくするのが望ましいと考える。河口域には生活の足として渡船が残っているので、これを活用するのも風景の保全・創出につながると考える。

5. おわりに

都市といっても様々であり、また一つの都市内でも河川毎に風景は異なる。都市河川の風景が生き生きとしているかどうかは、結局その地域（水域）の特性がどのように反映されているかによると考える。